

でみられている。シラヒゲウニ資源を回復させるためには、放流技術を確立して人工種苗の効果的な添加を行うと共に、資源管理手法を開発して天然群の資源回復をはかることも重要である。天然群調査から今帰仁村古宇利沖では、6～9月のウニ漁期に2歳ウニの大半が漁獲され、9～1月の産卵期に残っているウニの多くは1歳ウニであることがわかった。成熟調査によると殻径60mm以上のウニは成熟するので、加入資源が同海域に由来するならば、漁期には小さくて漁獲されなかった1歳ウニが成長し、当海域の再生産の主役を担っていると考えられる。今後は、現在のウニ漁業下での再生産構造を把握し、効果的に再生産量を確保する管理方法の導入も視野に入れた調査を実施する必要がある。

参考文献

- 1) 島袋新功他 (1982) : 大規模増殖場開発事業調査報告書, 昭和53～55年度, 恩納地区, 沖縄県水試, 50pp.
- 2) 吾妻行雄・富安俊 (1995) : エゾバフンウニ人工種苗放流マニュアル, 北海道中央水試, 26pp.
- 3) 渡辺利明・勝俣亜生 (1983) : 昭和57年度保護水面管理事業調査報告書, 沖縄県水試八重山支場, 51pp.
- 4) 渡辺利明他 (1989) : 恩納村大規模増殖場稚ウニ調査, 昭和62年度沖縄水試事報, 201-206.